

日本英語教育史学会 会報

324

2024 年 12 月 21 日

HiSELT *Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan*

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

 事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
 県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
 tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
 e-mail: membership@hiset.jp

 会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)
 ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
 ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第300回研究例会報告

2024 (令和 6) 年 11 月 16 日 (土), 第 300 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は 33 名でした。

例会では 2 つの発表が行われました。一つ目は「シリーズ: わたしのしごと」という企画で田邊祐司氏 (専修大学) が「口のことば」としての英語研究と教育の 40 年」というタイトルでお話されました。二つ目は「シリーズ: 私の愛した教材」という企画で河村和也氏 (県立広島大学) が「恩師の編んだ教材」というタイトルで発表されました。司会は熊谷允岐氏 (茨城大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は田邊氏, ②は河村氏の発表への感想です)。

<発表①の感想>

- ◆田邊先生の先生の多岐にわたるお仕事について知ることができ、とても感銘を受けました。また教え込むのではなくつかませる指導というお言葉が特に印象に残りました。(匿名希望)
- ◆日本ではスピーキングよりも書いてあるものだけを読むだけの英語教育が自分の経験からしてもほぼ大半を占めているなど思いました。自分は英語のコミュニケーションをもっと学びたいと思っていたのに大学に入った今、ネイティブの授業で会話などは行うことが増えたもののまだまだ聞いて終わりの受け身の授業も多いなど改めて感じました。実際に田邊先生の授業ではペアで会話やみんなの前で発言する機会が設けられています。教え込むのではなく、生徒自身が体験して気づいて口に出して覚えることで自分も簡単に記憶に残っていていると実感しています。自分はあまりメモを取るといったことはせずにその場で覚えようとしてしまうのですが後で思い出してメモをすと言ったことはこれからしていきたいなど思いました。(匿名希望)
- ◆田邊先生の圧倒的な仕事量にまず圧倒されました。その情熱、使命感はどこから来るのでしょうか? お身体が心配になります。英語教育史に興味を持たれたきっかけが、若き日に豊田實著『日本英学史の研究』(1939)を読み、感銘を受けたからとのこと。普通ならそこまでですが、豊田が九州大学に残された英学史資料の宝庫「筑紫文庫」を閲覧に、広島から 750cc のバイクで何往復も通われたあたりが、実に田邊先生らしいと思いました。すごい情熱ですね。その熱量をいまだに保ち続けておられることに驚きと感動を覚えます。そのことは御新著『日本人は英

語の発音をどう学び、教えてきたか』(研究社, 2024)によく表れています。ですが、くれぐれもお身体を大切に！(みかん舟)

◆まさに八面六臂の...という内容でした。今回は「口のことば」がメインなので、英作文の話は少ないかな、と思っていたのですが、某誌の連載の話から核心に迫るコメントも聞けて満足です。新刊もしっかり読みたいと思います。(tmrowing)

◆田邊先生とはこれまで多くの時間を共有させていただいておりますが、それでも今回のご講演では初めて何うお話も多く、大変興味深く拝聴いたしました。柔軟性を保ちながらも、本質を決して見失われない田邊先生のご姿勢のルーツを改めて知ることができ、大変有意義な時間となりました。また、内容とは直接関係ありませんが、馬本先生とのやり取りを通じて、まるで兄弟子と弟弟子のようなお二人のこれまでのご関係が垣間見え、まるでタイムスリップしたような不思議な感覚を覚えました。今回はオンラインでの機会でしたが、ぜひまた直接お目にかかれる日を楽しみにしております。この度は貴重な講演をありがとうございます。(小林大介)

◆研究者の職の現状を知ることができ、また教科書作成者の考えなど日々生活している中では感じとることができない内容を知ることができました。また研究のためにバイクで長距離を走られたことを聞いた時にまだまだ自分の研究に対する熱量が足りないと思いました。今回の発表はとても良い刺激になり明日からの研究の糧にしたいと思います。(奈良の鹿)

◆「わたしのしごと—“口のことば”としての英語研究と教育の 40 年」というテーマにおいて、田邊先生のこれまでの 40 年間についてお話を伺い、なかでも先生が紹介されていた、吉川英治先生の「我以外皆我師」という言葉が特に印象に残り、心に響きました。周りに対する感謝の心を忘れず、英語と真剣に向き合い、自己実現に向けて努力していきたいと思いました。(emu)

◆日本の英語教育において「筆のことば」に重きがおかれる中で、田邊先生が実践されてきた「口のことば」の英語教育についての講演を拝聴することができ、感謝しております。指導法の転換という点で、A と同じ発音を探す活動の例を挙げられており、この例から、只教師の発音を繰り返すのではなく、活動を通して学習者に気づきが生まれる指導を行なうことが定着に繋がると分かり、教師が教え込むのではなく学習者につかませる指導法の重要性について学ぶことができました。このことから、学習者が気づきを得られる指導法を実践するための知識を身につけ、授業の工夫を凝らしていくことが教師には必要であると感じました。(匿名希望)

◆田邊先生の発表をお聞きし、「筆のことば」を重視する傾向に疑問を持ち、音声言語としての英語や英語教育を中心に「口のことば」としての英語研究を現在まで続けてこられた、英語研究や教育に対する先生の想いを強く感じられました。そしてこの 40 年間は、英語を自ら進んで学び、研究してきた日々の積み重ねがあるからこそ、英語教育以外の部分でも通訳などの幅広い仕事に繋がられているのだと思い、仕事量の膨大さにも驚かされました。発表では、文字言語だけでなく、音声言語としての英語を重要視する必要があること、そして、文字言語を中心にしていないと学ぶことができない学びが、音声言語にはあるのだと理解することができました。また、**That's it.** はアクセントを置く位置によって、その意味合いが変わってくることを知り、英語は実際に音で聞き、触れなければ、ただその書かれた文字を見るだけだと直訳した意味そのままを受け取ってしまうため、音としての英語を学ぶ重要性があることを学べたと思います。教師が音声としての英語を指導することに関しては、発音を教え込むというよりも生徒に気づかせ、つかませる指導による教師の働きかけが大切であり、これからの音声指導は発見学習的な指導

であることが必要なのだと考えさせられました。この講演で学んだことを胸に、教師を目指す上で音声としての英語の基本を身に付けながら、英語学習も日々積み重ね、英語の「好き」を増幅させていきたいと思えます。この度はお忙しい中、講演をしていただきありがとうございました。(匿名希望)

◆今回、田邊先生のこれまでの活動について、さらに詳しくみることが出来ました。田邊先生が関わって来られた方々のお話など、“口のことば”との関わり方を少し垣間見られた気がしました。“筆のことば”ではわからなくても“口のことば”では含まれている、言葉に隠されている意味など英語という言語の、音声を学ぶ必要性を感じ、より一層音声に向き合う姿勢を作ることが出来ました。また、今回参加させていただき、田邊先生の英語教育に対する考えにも触れられる良い機会となりました。田邊先生が、欧米ではつなげて教えられている4技能(5領域)が日本の英語教育では分けられていることに問題意識を持ち、歴史研究から今の指導法について考えることに力点を置かれていることを知りました。これらのほかにも教員が働きかけを行い、学習者が体験や思考、自己効力感を通して、気づき、つかませる指導法を進めていくことを大切に考えられているという田邊先生の考えから、今後英語教員として求められている姿勢、そして英語教育に必要な指導法や改善点などについても学ばせていただきました。しかし、さらに具体的にどのような点をどのようにしていくべきなのかなど、学んだことを活かしていかなければならないかは今後私自身が考えていかなければならない点であると考えています。私自身は音声学習を苦手としており、自身の英語学習にも役立てていきたいと考えています。そして、最後に強調されていた「我以外皆我師」を大切に、これからも学び続けていきたいと思えます。(匿名希望)

◆日本の教育現場では英語を「口のことば」よりも「筆のことば」として教えることに重きが置かれているという問題に対し、音声学習の重要性や音声指導に必要なことを学ぶことができました。アルファベット学習においても音声学習と組み合わせることが可能だということを知り、今後教員を目指す上で、自分が今まで生徒として経験してきた英語の授業において、どのような活動に音声学習・音声指導を取り入れることができるかを考えていかなければならないと感じました。(名護裕香)

<発表②の感想>

◆今まで知らなかった教材をたくさん知れて今後の参考にさせて頂きたいと思えました。思いいれのある教材があるというのは素晴らしいことだと感じました。(匿名希望)

◆私は高校時代に先生のように高校の先生からおすすめの参考書を紹介してもらったことはありませんでした。そして、自分は英検利用であり英語の勉強を受験時代にしていなかったため参考書などもほぼ買っていません。今回の講演で色々な参考書を紹介されていましたがどれも知らない参考書だらけでした。ただ、英語の勉強をこれからしていく中で何か分からないことが出てきた時に調べられる文献は多くあることを知れました。特に自分は何か単語を覚える時に例文は意識していませんでしたがこれからは確認してもっと活用を増やしていきたいと思えました。(匿名希望)

◆1980年代ごろまでの高校英語科(少なくとも上野高校の)には、個性豊かな実力ある先生が多くおられ、受験勉強にあくせくするより、文学作品を1冊読み通すような英語教育が行われ

ていたことに感銘を受けました。ご発表を拝聴し、英検だ TOEIC だとスキル一辺倒で痩せこけてしまった昨今の英語教育を問い直さねば、との思いを新たにしました。以前の都立高校のように教員の研修日が週 1 日あるような環境こそが、豊かな学びを保障するのだと改めて思いました。(みかん舟)

◆同世代の同窓で、同僚だったこともある河村先生のお話は、懐かしさもありながら、自分ごとに置き換えて「自分が生徒に示し、与えてきた教材は？」と色々と考えさせられるものでした。教材、裏返せば学習材、に求められる要因・条件は教師だけでなく学習者が変われば変わってくるのだとあらためて実感しました。(tmrowing)

◆「恩師」と「教材」というキーワードを軸にまとめられたご発表、大変興味深く拝聴いたしました。大学や大学院時代の恩師については語ることがあっても、高校時代まで遡って考察されることは容易ではないと感じております。そのような中、当時の学生証を残されていたという点にも、河村先生の歴史家としての素養に驚きを隠せませんでした。教育の主役は学習者であると考えますが、その学習者にどれだけ深いインパクトを与えられるかが、教員としての真価を問うものだと思います。今回のご発表を拝聴し、改めて自身の教育活動を振り返るとともに、さらに研鑽を積む必要性を強く感じました。貴重なご発表をありがとうございます。(小林大介)

◆いわゆる Z 世代の一員である私の高校校時代・大学時代に使用した教材を思い返しながらかご発表を拝聴させていただきました。とても興味深く、また教材を研究する私には目から鱗の内容でした。お恥ずかしながら私は教材に対する思い入れがありませんが河村先生のご発表によりもう少し味わって教材をみたいと思いました。(奈良の鹿)

◆別の予定との兼ね合いで、河村先生のご発表を最後まで拝聴することができなかったのですが、先生の「読む・書くの融合」のお話を伺い、これまで 4 技能を切り離して捉えていた自分の考えを改めるきっかけになりました。(emu)

◆河村先生は高校時代に関わった様々な恩師とのご縁や繋がりを通じて、自分の教材研究に活かされていたのだなと思いました。そして、その先生方は教科書、問題集、参考書まで広く携わっているのだと知ることができました。また、須貝先生が『英英辞典』を勧めていたとお聞きし、英和辞典も良いところがあるものの、英語に直に触れるためにはやはり『英英辞典』を使うのが良いのだなと改めて思われました。このように、河村先生が学生時代に関わった先生方の著書からあらゆる影響を受けているのだと実感しました。また、「使う教材を一旦教員側で受け止めること」とおっしゃっていたのを踏まえて、教員に教材の扱い方が求められているなと感じました。「生徒たちの抱える疑問」は何なのか教員は逐一確認しながら、英語の指導を追求していく必要があるのだと考えさせられました。そして、若林先生の「教わったように教えるな」をそのまま教えるのは違うという河村先生のご意見は、私も共感できる部分であるなと感じました。この「教わったように教えるな」をそのまま受け取るのではなく、生徒にとって教師の教えがどう影響を与えるのかを考えた上で、その言葉に向き合うことが大事なのだと思いました。私は教材について今まで深く考えたことがありませんでしたが、この講演によって教材に関する学びを深める良い機会となりました。この度は河村先生ご自身の「教材論」に関して、お忙しい中、貴重な講演をいただきありがとうございます。(匿名希望)

◆恩師や恩師が作成に関わられた教材を通し、多くのことを学び、多くのことを感じられ、考え

られているのだということがとても伝わりました。教材の特徴をよく捉え、分析されているだけでなく、自身の教材を作った先生との関わりの経験も含めて、大切にされており、自身の力となっているのだと感じました。また、学んだことから問題提起されており、より深めていこうという姿勢は私も学んでいきたいと思いました。そして、生徒からの意見を大切にするという姿勢、常にアップデートしていく姿勢を大切にしていきたいと思います。特に、「教わったように教えるな」という言葉は印象に残っており、私自身がやりがちになってしまっているという自覚もあるため、さらに意識していきたいと思います。先生と同じように、教わったことを大切にしつつ、自身の指導をアップデートしていきたいと思います。今回、母校の先生方を遡り、いろいろな発見もされており、とても驚きました。私が関わってきた先生方にも、同じように教材作成に関わっている方もいる可能性もあるかもしれないと思うと、私自身も母校の先生方に目を向けてみたいと思いました。(匿名希望)

◆高校時代のお話の中でおっしゃっていた、英字新聞の人生相談の欄を読み、それに対する答えを書く課題があったということがとても印象に残り、英語と日常生活の事例をうまく結びつけながら読み書きの技能を鍛えることができる優れた活動だと感じました。学習指導要領で言われる 4 技能 (5 領域) をいかに組み合わせさせて生徒に学習してもらうかを考えるヒントを得ることができた貴重な機会となりました。(名護裕香)

<会全体に対する感想>

◆貴重な機会をありがとうございました。(匿名希望)

◆とてもスムーズな運営をありがとうございます。(匿名希望)

◆このような貴重な例会をオンラインで、しかも非会員にも無料で開いていただいていることに感謝します。(tmrowing)

◆この度、「日本英語教育史学会 第 300 回 例会」への参加の機会を与えてくださった田邊先生、お忙しい中、発表してくださいました河村先生、並びに例会を運営してくださいました学会関係者の皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。(emu)

◆お二人の先生方の発表から、音声言語としての英語研究と、恩師との関わりから教材について考える「教材論」を通して、それぞれ異なるアプローチから英語研究をされ続けてきたのだなと実感しました。このように英語研究に関して異なる側面から取り組んでいる中でも、共通して「教わったように、教えるな」という言葉を上げていらっしやっただのが印象に残っています。「教わったように、教えるな」にならないよう、英語教師として新しい指導をやっていこうとする姿勢と共に、その言葉をそのまま受け取らないことも必要なのだと理解できました。教師論だけで片付けることなく、自分が教師としてその言葉をどう解釈し、「生徒の疑問」を気にかけてながら、授業で扱う教材をどう活用するかよく考えることで、英語を教える教師の立場を理解することが少しでもできたのではないかと考えています。英語教師を目指して自分にできる英語学習に励んでいきたいという思いを改めて感じ、先生方から大いに刺激を受けた研究例会でした。本日は田邊先生及び河村先生、貴重な発表をしていただきありがとうございました。(匿名希望)

◆今回参加させていただき、学びの多く、考えさせることばかりでした。お忙しい中発表してください、心より感謝申し上げます。今後のご活躍をお祈り申し上げます。(匿名希望)

◆先生方のご発表テーマが学生にもわかりやすいもので、無知ゆえに話についていけないとい

うことが起こらず、楽しみながら学ばせていただきました。この度は参加させていただき、ありがとうございました。(名護裕香)

発表を終えて

田邊祐司 (専修大学)

今回は「わたしのしごと」というテーマの下、浅学非才ながら小生の「口のことば」(音声言語)を中心とした英語音声の研究・教育について語りました。音声は言語教育の中核領域ですが、日本の学校教育ではその重要性は認識されながらも、「筆のことば」(文字言語)の指導が中心になってきました。

発表では、まず英語音声指導史を概観した後に、指導アプローチの最先端の考え方を紹介しました。その後、学会発表、講演、執筆(連載記事)、教員研修、教材開発などの各領域での奮闘を駆け足で紹介しました。しかし、40 有余年を 50 分に圧縮するのは土台無理な話で、お見苦しい箇所も多々あったと存じます。それでも小生が、いかにこの perennial issue と対峙してきたのかはお伝えできたと信じます。この国では、英語という元々はひとつの言語を、時代時代の要求により「分化」、「編集」して教えてきました。その過程で「口のことば」は傍流に追いやられました。このままの状況が続くのは国にとっても損失です。改善は待ったなしの段階に入っていると思います。そのためには、ダビデがゴリアテに戦いを挑むような思い切った革新が必要でしょう。

発表を終えて

河村和也 (県立広島大学)

受験勉強との縁が薄く、その方面の教材への愛着はあまりなかったのですが、受けてきた授業を振り返れば数々の「恩師の編んだ教材」に出会っていたことに気づき、今回のテーマを設定しました。発表では、教員になってから自分が授業をするうえで多くを学ばせていただいた書籍類もご紹介し、どうか責めを塞いだ次第です。

高校時代の先生方は、それぞれに研究テーマをお持ちで参考書や問題集の他にも数々の書物を出され、次々に大学に転出されました。そのような方々にご指導いただけたことは、実に恵まれたことだったと思います。母校を縁に、先生方と編集者とのネットワークに引き入れていただいたこともありがたいことでした。

また、大学時代には、英語の各分野の第一人者から直接のご指導をいただきました。教科書に解答や解説がなくとも、著者ご自身が授業をお持ちなのですから心配なく学ぶことができました。思えば、これも稀有のことだったのでしょう。

教材論と呼べるほどのものは示せませんでしたが、各種の教材についてある程度の類型化を試みました。ご参加のみなさまからご意見をいただき、これからの授業に繋げる道筋を考えることができたことに感謝申し上げます。

>> 事務局より

- ・9月および11月に理事会を開催し、全国大会および学会誌を主な議題としました。詳細は次号でご報告します。

・会費の早期納入にご協力くださりありがとうございます。事務作業が一部遅延しご迷惑をおかけいたしております。勝手ながら年末年始はお休みをいただき、新年 1 月 8 日より通常の業務に復します。

5 月の全国大会は横浜で ～今からどうぞご予約ください～

2025 年度の全国大会は神奈川大学横浜キャンパスで開催します。ご発表とご参加のお申し込みについては、次の会報および公式ウェブサイトでご案内します。

日本英語教育史学会 第 41 回全国大会 (神奈川大会)

期日：2025 年 5 月 17 日(土)・18 日(日)

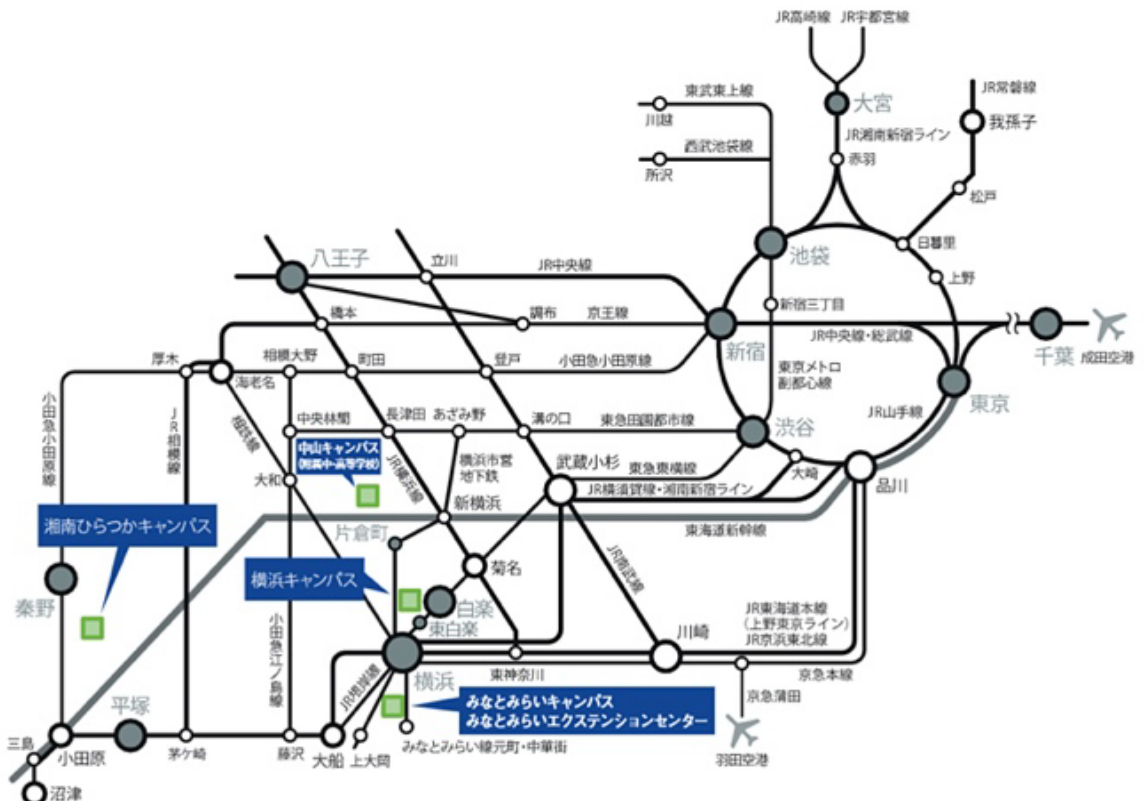
会場：神奈川大学横浜キャンパス

(神奈川県横浜市神奈川区六角橋 3-27-1)

今回も簡易的なインターネット配信を検討していますが、対面での開催を基本とします。ご都合のつく方はぜひとも初夏の横浜にお越しください。

会場は東急東横線の白楽駅または東白楽駅より徒歩 15 分弱。横浜駅から横浜市営バスの便もあります。

お越しの方・宿を手配される方は、2023 年 5 月に第 39 回全国大会を開催した「みなとみらいキャンパス」とお間違えのないようご注意ください。



(交通アクセス図は神奈川大学ウェブサイトから)

)) この先の研究例会・全国大会

◆ 第 301 回研究例会 2025 年 1 月 11*日 (土) オンライン

*【会報編集部より】第 301 回研究例会の日程について、会報 322 で 1 月 18 日 (土) と誤った記載をしておりました。ここに訂正し、お詫びを申し上げます。

◆ 第 302 回研究例会 2025 年 3 月 15 日 (土) 専修大学サテライトキャンパス (対面開催)
→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (3 月発表希望であれば 12 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

日本英語教育史学会 第 301 回 研究例会

日 時 : 2025 年 1 月 11 日 (土) 14:00~17:00 オンライン開催

「戦前の中学校英語教科書における教科横断的要素について (3)」

二五 義博 (山口学芸大学)

【発表者から】中学校英語の教科書に CLIL が取り入れられるようになったのは現代が初めてなのであるか。この問いから始まった一連の研究は、全国大会での発表に続き、今回で第 3 弾となる。本発表では、戦前・戦中期を中心とした中学校英語教科書 (三省堂 (1935) *Current English readers* や泰文堂 (1935) *New start readers* など) の分析を通して、海外の事例や日本の現在のみに目が向きがちな CLIL 研究に対して、日本の過去からも学ぶべき点が多いことを示唆したい。

「どのようにして英検協会による高校教育への関与が正当化されていったのか? (1963-2000)」

孫工 季也 (金沢学院大学)

【発表者から】本報告では、日本英語検定協会が発行する機関紙を精査することで、英検協会が高校教育への関与を正当化していった経緯と特徴を、民間教育事業者による学校教育への関与を扱う研究に位置付けつつ検討し、以下 3 つの正当化を明らかにする。①「公共性」の構築、②短大・大学入試勉強との連結、③入試における英検優遇校の増加。以上の報告を踏まえつつ、当日は本報告をどのようにして英語教育史研究に位置付けるのかについて議論を行いたい。

参加申込 URL :

https://docs.google.com/forms/d/1eEhIMOuDH9MusfnSBTs33LjJ_RQh-PWv8CH1u0G9znQ/edit?ts=667d109a

参加費 : 無料

問合せ : 日本英語教育史学会例会担当 (reikaitensou@gmail.com)

EDITOR'S BOX 秋田では熊の問題が深刻です。市街地にも出てくるので外出に不安を感じます。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 wakaari@nifty.com)